村野次郎創刊

香蘭

2024年（令和６年）３月号

創刊100周年記念特集号

第 101 巻　　第 3 号　　通巻 1119 号

二〇二四年（令和六年）三月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇一巻第三号

村野次郎作品　私の愛誦歌（103）

あかときのひよどり鳴けり
冬木々のあたりしきりに明るくなりて

『角笛』

高畠憲子

ちょうど一年前、香蘭百周年の年明けに、原点に帰る思いで次郎歌集を手に取った。その時、吸い寄せられるようにこの一首が目に飛び込んできた。とある冬の朝の、たまたま聞こえたひよどりの声と眼前の景。それだけがシンプルに詠まれ、何ともすがすがしい。

思い返すと、その新年を迎える明け方。わが家の裏山でもしきりに、ひよどりが鳴いていた。寒い空気を裂くピーヨ、ピヨッという高い声は鋭すぎず、どこか親しみがある。こちらの心も透明になり、素直な明るい気持になった。「あ」で始まる頭韻が三回と母音のア音の多用が、この歌の明度を上げている。

『次郎歌話』に随筆「ひよどり」がある。新宿角筈のご自宅の庭木とひよどりについての一文で、格別お好きな鳥であったようだ。先生は学生時代、通学路の鎮守の森や藪かげでひよどりの声を聞いていらしたので、〈街中であの声を聞くと旧知の人に会ったようななつかしさが湧く〉と書いておられる。

（『角笛』13頁、『村野次郎三百首』107頁に掲載。昭和47年作）

香　　蘭

2024年（令和６年）３月号
第101巻　第３号　通巻1119号

創刊100周年記念特集号　特集号の部　目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（１０３）……高畠憲子…表二
口　絵（1～24）
終刊号を見据える――創刊１００周年への祝辞に代えて……千々和久幸…4
祝　辞……高野公彦…6　森山晴美…7
祝　辞……藤原龍一郎…8　加藤英彦…9
「駿台論調」という場所　～人生を決めた縁　先輩・後輩対談～
星野和央、千々和久幸…10
香蘭との出会いは新聞広告だった……森幸子…25
インタビュー　初心から50余年……工藤渓子…26
「香蘭」の女性先輩のうた……杉山伊都子…40
宮沢賢治の手帳……和田羊子…42
再録記事……53
昭和十年五月号に掲載の謦咳書……56
昭和四十八年一月号　五十周年を迎へて……村野次郎…57
平成十五年十月号　創刊八十周年記念特集号
いま、青春を呼び戻そう……千々和久幸…58
「生きる」をうたった名歌　千々和久幸歌集から……丸山三枝子…65
平成二十五年十月号　創刊九十周年記念特集号
父・村野次郎のロマンを語る……中村富美子…66
物故選者のプロフィール……75
創刊一〇〇周年記念　会員自選「私の三首」（一四六名）……99
支部の現況……177
表紙絵……山口蓬春「桃」　目次・カット……和田和雄

終刊号を見据える
――創刊１００周年への祝辞に代えて

千々和　久幸

「香蘭」創刊１００周年、誠におめでとうございます。これまでにも5年刻みの創刊記念日に、わたしは創刊者村野次郎を始め諸先輩の功績と遺産を讃え、今日の「香蘭」のあることの有り難さに深甚なる謝意を表して参りました。その一方で「短歌結社は偉大なるマンネリズムの所産である」とか「伝統に反逆する者こそがもっともよく伝統を継承する」あるいはまた「長きがゆえに貴からず」と自らを戒めても参りました。それは今日以降も「香蘭」が継続して発展を目指す組織体であるという変わらぬ覚悟を披瀝したものでした。本日は少しく見方を変え、「香蘭」は終刊号をどのようなかたちで刊行するのかという観点から、創刊１００周年の意義を考えてみたいと思います。

端的に言えば、その日暮らしに等しい「香蘭」が１００周年という節目に終刊号の側から長期展望を考えておくということであります。１００周年という節目に、「香蘭」に与えられた使命と同時に、その命数をも数えておくということであります。誤解されませんように付け加えておけば、これは長期展望であり今すぐ終刊号の準備をする、と言うことではありません。マンネリと言われようと言われまいとこれまで通り歌誌を出すことに変わりはございません。またマンネリの心地よさ、安堵感というプラスの面も一方で評価しておくべきでしょう。

わたしがここで強調しておきたいのは、これからの「香蘭」は既定路線の上を走るだけではすまされなくなるということであります。すでにいくつかの結社誌が廃刊になったり、隔月刊、季刊になっ

たりしております。あっさり言えばそれは超高齢化社会の到来という時代のせい、であります。会員数の減少に歯止めがかからず、同時に作歌の場が結社を越えて広がったという事情によります。超高齢化社会と情報社会の深化が結社に新たな変革を促しております。恐らく結社誌の綻びは思わぬところから突然に一気に始まりましょう。いやもう「香蘭」の綻びは始まっていると言っていいでしょう。

そうでなくとも現在の「香蘭」は老年期に入っております。これは会員の平均年齢だけではなく、作歌精神の若さに関わる問題すなわち作歌精神の衰退であります。「継続は力なり」という俗論を信ずると否とに関わらず、１００年の老舗たる「香蘭」は老大国化したという事実であります。

わたしは平成13年（２００１年）10月にに代表に選任されたとき、「いま、青春を呼び戻そう」という運営方針を明らかにしました。その骨子は「香蘭」をエキサイティングで活力ある組織にするために「先ず先頭集団を作る」と宣言したのでした。それが今日の明宝研究会であります。手前味噌を承知で言えばそれ以後、明宝研究会は内外に開かれた組織として「香蘭」を牽引し、所期通りの成果を納めた証として今日の「香蘭」の成熟があると信じております。この先頭集団が健在である限り、「香蘭」の伝統を―村野次郎が掲げた「香蘭」の火を継承してくれるでありましょう。しかし先頭集団にも新陳代謝が必要なことは言うまでもありません。

かたちあるものはいつかは滅びます。滅ぶなら「香蘭」らしい滅び方をしたい、というのが最後のわたしの美学であります。端的に言えば「香蘭」が健在であるうちに終刊号を見据えて、新たな出発を期したいと考えております。わたしは終刊号を悲観的、退嬰的に考えてはおりません。終刊号を遠望しさらに「香蘭」の伝統を引き継いで参りたいと思いを新たに致しております。

世界でもっともエキサイティングでチャーミングな短歌結社「香蘭」は、いま新しい船出を前に百年の重さに武者震いをしております。本日は誠におめでとうございました。

白秋短歌の大きな流れの中に

高野　公彦

白秋門下の優れた歌人はたくさんいるが、中でもすぐ思い浮かぶのは村野次郎、木俣修、宮柊二の三人である。私はひそかにこの三人を「白秋門下の三大歌人」と呼んでいる。ただし、村野次郎は明治27年生まれで、白秋と9歳しか違わない。

私の手元に復刻版の村野次郎歌集『樗風集』（短歌新聞社刊）がある。年譜を見ると村野次郎は、白秋の「朱欒」や「地上巡礼」に参加した後、大正12年3月に「香蘭」を創刊し、この年から数えて「香蘭」は令和5年3月ついに創刊百周年を迎えた。まことにめでたいことである。

山葵田を走る真清水くれなゐの沢蟹いでてかぎろひにけり
眼にふれて時にひかるは春の日に蜘蛛の糸など飛ぶにかあるらし
いましがた霰こぼしてゆきし雲のさむざむとして夕焼けにけり

こうした歌を挙げながら、「解説」で千々和久幸氏は、「わずかに哀愁を帯びた、平明にして流麗な歌風」「茫漠たるさすらい心は、人生的ロマンに根ざし、清らかで艶のある世界を輝かせている」と村野短歌の特徴や美点を見事に照らし出している。

村野が建てた西新宿の明宝ビルで、十年ほど前から「コスモス」は東京歌会を毎月開催している。14階に「香蘭」の編集室がある。私は千々和さんの紹介でこのビルのことを知り、歌会の会場を借りた。まさに白秋短歌の大きな流れの中に「香蘭」「コスモス」が共存しているのだ。

歴史と現在の十字路で

森山　晴美

「香蘭」１００周年おめでとうございます。１００年前といえば新興芸術の渦巻く大正末年に創刊されたわけで、激動の昭和を経て平成、令和に至り、結社を取り巻く状況の厳しい今、大台ともいうべき１００年を迎えられたこと、さすがと思います。

改めて短歌年鑑を開き確かめると、「香蘭」は今数百ある短歌の結社、団体の中で十一番目位に古いのですね。白秋の弟子で創刊者だった村野次郎は詩人の村野四郎を弟に持ち、実業家としても一家をなしながら短歌を愛し続け、今なお「香蘭」の事務所は会社のビル内にある。懐の深いこの創刊者への敬愛と責任の念は、１６４回連載が続いている千々和久幸氏の「村野次郎への旅」からも感じられます。

そして特筆すべきは、今の「香蘭」が自誌の伝統に甘んじず、緊張を持ち続け、謀反気と活力を持った集団であり続けていることです。穏健な前任者からバトンを受け継いだ代表の千々和氏は、前衛から出発、気鋭の詩人で実業界に身を置いた現実感覚ももつユニークな人。私は十年前の「香蘭」の祝宴の席で、代表としての氏の挨拶が厳しい反語調であることに驚き、会員の方々が氏の言葉を常の事として受け止めている様にも感銘しました。代表が腸（はらわた）をさらけ出して詠み書き、月例の研究会では大勢が真摯に幅広く学び合い、時にはお祭り騒ぎで精神の洗濯をする。こうした多面的な交流ができる場がよき結社の在り方でしょう。及ばずながら同時代の友人の気分で応援しています。今の「香蘭」は千々和氏の発想と体力が有能な次世代の方々と嚙み合っている、幸福な状況と思います。歴史と現在の十字路で、これからも輝いて下さい。

文学集団の志の持続の熱さ

藤原　龍一郎

平成二年に香蘭短歌会から刊行された『次郎歌話』上下二巻という本があります。村野次郎氏の歌論や短歌に関する随想を集大成した本なのですが、この上巻に「香蘭創刊前後」という文章が収録されていて、題名通り「香蘭」誌の創刊にいたるいきさつが丁寧に記述されています。この文章の初出は「香蘭」昭和四十一年一月号から六月号まで。当時の「香蘭」の誌友のために、主宰の村野次郎氏がご自分の体験をもとに解説されたものだと思います。

この文章を読むと、大正三年から七年くらいまでの北原白秋の気難しさ（わがままさ）がよくわかります。この時期の北原白秋は前期「ザンボア」、「地上巡礼」、「烟草の花」、「曼陀羅」、後期「ザンボア」と次々に雑誌を創刊しては廃刊の繰り返し。これでは門下の人たちは戸惑うばかりだったでしょう。

村野次郎氏は前期「ザンボア」から投稿を始めて、それぞれの雑誌を経て、同志の河野慎吾氏らとともに大正七年十二月に「秦皮（とねりこ）」を創刊します。この雑誌はともかくも継続発行されるのですが、やがて、経済的な不安定さと同人内の意見の不統一があらわになり、ついに大正十二年三月に、新雑誌「香蘭」が村野次郎氏を中心に創刊されることになります。これが百年の一歩目です。

長々と「香蘭」創刊前後のことを書いたのは、やはり、ここから百年の歴史が始まり、今日につながっているということを貴重に思い、敬服するから。企業にも百年持続するものはめったにありません。文学集団の志の持続の熱さを確認し、改めて、「香蘭」創刊百周年を心からお祝い申し上げます。

ひとつの通過点として

加藤　英彦

「香蘭」創刊百周年、本当におめでとうございます。大正12年に村野次郎が創刊して百年、通巻では千百冊を超える歌誌を世に送りだしたことになります。詩歌百年の歩みに通暁するなど決して容易ではありませんが、歴史とは問われ続ける〈現在〉の無数の点描であり、展望とはその〈現在〉の内がわに明日を宿しているのだとするならば、そんな〝今〟を仮借なく瞠め続けることこそ大切であるように思えます。百周年もまた一通過点に過ぎません。

「長きがゆえに尊からず」、「伝統に反逆するものこそが、もっともよくその伝統を継承する」とは、主宰千々和久幸氏がつねに語られてきたことばです。これは文学のみならず諸事万般に通ずる真理ですが、わたしはそんな氏の詩精神の高さに多くを学ばせてもらったと改めて思います。

継承と変容――いわば不易流行は、時代のなかで問われるべきものが何であるかを常に意識することであるのかも知れません。今までそうであったように、これからの「香蘭」がいつも挑発的な一誌であり続けることを願っております。

現在、「香蘭」の選者は千々和久幸代表を筆頭に丸山三枝子、桜井京子、渡辺礼比子、高畠憲子氏ら実力派四姉妹を擁し、そこに堅実な編集担当市川義和氏、牧野道子氏、石井雅子氏、満木好美氏らが加わって厚い編集態勢を固めておられる。創刊して百年、この肥沃な文学の土壌からまた新しい芽が吹きだすことを祈って、今後とも「意図されたマンネリズム」の道程を邁進されますことを！

香　　蘭

2024年（令和６年）３月号
第101巻　第３号　通巻1119号

創刊100周年記念特集号　３月号の部　目　　次

招待作品（奇数月連載）③　鬱血のこぶし……加藤英彦……198
作品
一……200
二……218
三……227
推薦香蘭集……233
香蘭集……234
作品一　十首選（一月号）渡辺礼比子選……212
作品二・三　十首選（一月号）千々和久幸選……214
一頁公論（34）　恋の歌……青山侑市……211
村野次郎への旅（167）……千々和久幸……216
「香蘭」とともに（5）〈「残酷」な記憶〉〈戦うための「文学」〉……鈴木桂子……224
続・酔風船（3）待つということ……千々和久幸……225
エッセイ・自由研究　五十年前の色紙と短冊……三神　進……238
焦　点（一月号）　思わず声を掛けたくなる歌……千々和久幸……242
作品評（一月号）　作品一……市川義和……244
作品二……関　哲行……246
作品三……中村陽子……248
香蘭集……小城勝相……250
七首抄（一月号）……柏原（義）・坂井・内海・坪井……252
緑地帯……松沢・能城・高島（崇）……254
明宝研究会第一四七回　十二月例会　老子を読む……丸山三枝子……256
歌集管見　川田由布子歌集『水の月』評……桜井京子……264
歌会及び会合・会員消息・他……266
編集後記・新宿日記……271
表紙絵……山口　蓬春「桃」　目次・緑地帯カット……和田和雄……表三

四選者の作品

煙のごとく

平塚　千々和　久幸

野の果てのけむりのごとく生きたしよ「無為自然」とは遠くあれども
おおかたは徒労に近き歌を詠みひとときのわが生に灯ともす
杖ついて元気に歩く人もいる二日酔いくらいでよろけるものか
穂すすきも狗尾草(えのころぐさ)も揺れている電車を待てる線路の脇に
過ぎし日のことは忘れん寒風に逆らうように山茶花の咲く
声揃え派閥解消をまた唱うバカは一つが覚えられずに
錘(おもり)なき歌詠みこよい寝(い)んとすけむりとならば安からましを
早いとも遅すぎるともまた思い妻一周忌の法要終えつ

歩く　我孫子　丸山　三枝子

生日の娘に知命おめでとうと言えば致命傷の歳とぞ返る
そうかそれなら同じ干支なるわたくしは致命傷の二倍を生きた
憎しみがとぐろを巻くという台詞ドラマに聞きてゴミ捨てに立つ
水道局に用足しに来て柿落葉うつくしき道を歩いて帰る
真っ直ぐに今日は歩けず「やすらぎの道」を道ばかり見て歩くなり
幼稚園すぎて竹内神社なり布佐の鎮守の参道あるく
松並木の参道ゆけば転がれる松ぼっくりは踏むな踏むなと
分かり合うことなど無くて雨に濡れ風に吹かれて立ちいる並木

椿象　東京　桜井　京子

たつぷりと時間がありて昼ひなか風邪ひきわれの小春日和よ
たくさんの薬を貰ひいくつかは間違へて飲み気付く五日目
風邪ひいてふさぐわたしの様子見に網戸に来たりあをき椿象(かめむし)
風邪ひいてねてゐる時間は人生の無駄遣ひなり無駄がよろしも
丁寧に言葉かさねて思ひやり溢るるあなたがほんたうは苦手
水べりに確かにをりしがあの時の塩辛蜻蛉どこにもをらず
河原には枯れた薄がよく似合ふ風がなびかす令和の薄
をちこちの漆(うるし)のもみぢの鮮やかさ小さかる木も小さきなりに

ちょうどよし　横浜　渡辺　礼比子

旅立てぬわれに見よとや銭湯の庭に今年のもみじ照り映ゆ
そのかみの料理塾にて習いたるお節もいささか持て余されて
昆布巻と黒豆だけはと意気込めどまず作らねばならぬ八首を
妻われの呆け具合が追い付いてちょうどよろしも夫となかよく
面会は十五分とぞタイマーがなりてそおっと母の手解く
ささやかな旅なりしかど翌日のこころは時に浮遊しており
捨て鉢になりて作ればいつになく夫に誉めらる「そばめしチャーハン」
遠く発つ君との別れを惜しみたる駅前喫茶〈鳥貴族〉となる

作品一　十首選

（一月号作品から）　　渡辺　礼比子　選

・白黒をはっきりさせて上を向くきみを見ており危ぶみながら
千々和久幸

大人社会における平和な人間関係は「妥協」や「和解」によって成り立っている場合が多い。しかしここで描かれている「きみ」という人物は、周囲から煙たがられても、しばしば事の是非、善悪、或いは真偽などについて、はっきりと決着をつけようとし、動じることがない。だから時には敵を作ることもある。堂々と顔をあげて生きている「きみ」の潔さを賞でつつ、はらはらしながら見守っている作者の目が温かい。

・パ・リーグのクライマックスシリーズを今日も観てゐる　とほき戦争
石井　雅子

昨今、俄かに野球熱が高まっているが、作者は筋金入りの野球ファン。「今日も観ている」ということはシリーズの最初から観戦していたのだろうか。そんな時、今の今も続いている異国の戦争の凄惨な場面がふと頭の隅をよぎった。いたたまれない思いにかられながらも、同時に、異国に起こっているのは所詮「とほき戦争」なのだと感情に蓋をしてしまいたくなるのも正直なところだ。それは恰も多くの日本人の本音を代弁しているかのようだ。

・本当の死亡時刻は区役所の夕べのチャイムの鳴りいずるとき
伊藤美恵子

最近亡くなられたお嬢さんの死がテーマなのだろう。病院、或いは療養施設で病む人に寄りそっていた作者は、医師に告げられた死亡時刻が事実と微妙にずれていることに気づいた。その「ずれ」が作者の胸にちくと突き刺さり、さらに悲しみを深くする。別れのときに聞こえてきた区役所のチャイムの音は、一首全体に鳴り響くレクイエムのようである。

・化粧室の明るき鏡の前に立ち再発したのと友に告げらる
伊藤　康子

たまたま化粧室の鏡越しに友と会話を交わしていたところ、病の「再発」という重い事実を告げられた。ただでさえ辛い話なのに、どんな反応をすればよいというのだろう。明るい照明の下で、お互いの顔がくっきり見えているこのシチュエーションにあって、話を聞かされる側には逃げ場がなく、表情を繕う余裕もなかった。作者の中には今尚悔いが蟠っている。その複雑な心境を主観をまじえず、淡々と一首にした。

・郵便受けからつぽなれば夕刊の来るまで土手の萩を見にゆく
城　富貴美

何か特別な便りを待っているというわけではないが、郵便配達の来る時刻には、習慣的にポストを覗いてみる。日によっては何も届いておらず、ちょっぴりがっかりすることもある。しかし夕方になれば、夕刊は必ず来る。それまでのぽっかり穴のあいたような時間

を埋めるために、「土手の萩を見にゆく」という。このフレーズが事実であっても、創作であっても、この結句によって、一首がぴたりときまった。何ということもない日常の細部を描きながら、そこはかとない哀感を感じさせる手馴れた歌。

・がしがしとビルつぶしゆく夏空に重機はいかに気持ちよからむ

鈴木　桂子

作者は潰されゆくビルの痛みではなく、潰す側の「重機」の快感を詠んでいる。斬新な発想の一首である。私だってこんなふうに思い切り破壊的になれれば、さぞ痛快であろうと想像している。一方、毎日繰り返し映像で見せつけられる、戦争による他国の病院や文化施設の破壊に思いを馳せ、戦争好きの為政者の心中を推測した、痛烈なアイロニーの歌と読むこともできるのではないか。

・図書館の返却日まであと二日もう一度読む「この世の息」を

長野　道子

結句の「この世の息」は、大森静佳によって書かれた河野裕子論であり、このタイトルは、河野の辞世「手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が」の一首に因んでつけられたという。熱心な読書家である作者は、図書館から借りたこの一冊を手放しがたくなり、返却日までの短い時間にもう一度手にとって読まずにはいられなかった。作者がどれだけこの本に執心しているかが想われる熱の籠った一首である

・昼休みにもう勉強をしなくていい音楽聴きつつ数独を解く

松沢みどり

勤め人である作者は、仕事に必要な資格試験を受けるためにこれまで頑張ってきた。母親でもあり一人何役も務めている彼女は寸暇を惜しんで昼休みまで勉強の時間にあてていたのだろう。上句には解放されたいまの気持ちがストレートに表れていて爽快だ。気晴らしの方法は人それぞれだが、作者の昼休みはいかにも楽しそうだ。

・気まぐれに口紅つければお母さん何処に行くのと嫁が訝る

宮原　迪恵

作者は日頃家ではノーメークなのだろう。たまたま今日は何がなし心が浮き立って、口紅をつけてみる気になった。女性は幾つになっても、そんな些細なことで「あてどなきあこがれ」の心を満たそうとするところがあるものだ。一方息子の嫁は姑のそんな女心には気づくこともなく、ドライな問いを投げかけてくる。結句の「訝る」には、「訝」られた照れ臭さと、いくばくかの自嘲的な気分が匂う。登場人物ふたりの心理の機微が窺われ、寸劇のような趣のある一首。

・事実とはすこし違へど遠雷のやうに聞きをり君の怒りを

桜井　京子

相手は怒っているのだけれど、事実認識において、ふたりの間にはいささかの齟齬があると作者は感じている。しかし相手に対してそれを正してことを荒立てる気はさらさらない。「遠雷のやうに」という比喩には作者の冷めた気分が滲んでおり、もしかしたら、こんなふうに対象を突き放すことで、自身の感情を鎮めようとしているのかもしれない。ところで、この歌を読んで、あれっ、この「君」って、もしかしたら私のことではないかしら、と思った読者はいないだろうか。簡潔な詠み口でありながら、そんなことを想像させるほど、確かなリアリティの感じられる一首である。

作品二、三　十首選

（一月号作品から）　　千々和　久幸　選

・荒畑にあまた太りし実をさげた花梨（かりん）一樹のため息をきく

安田　恵子

簡潔に詠んで淀みがない。つまりは一首の構成に緩みがないということ。熟れた花梨の実をジャムにする主婦も居なければ、棒で叩き落としたりする腕白もいない。熟れた花梨からすれば捥いで欲しい、捥ぐことで自分の命を愛でて欲しいのだが、近在にそんな人間はいない。だから悔しさで溜息が出るというのだ。

花梨のみならず柿でも葡萄でもその味を味わい尽くし、別の命に生かしてくれることが喜びなのだ。

・朝は麦茶昼に素麺午後は栗大活躍の鍋のいち日

三澤　幸子

花梨は食べられることを、鍋は人の手でフルに活用されることを待っている。鍋は美しく磨きを掛けられ、棚ざらしにされたのでは不本意だろう。鍋からすれば鍋奉行たるこの作者は、一日休みなく働かせてくれる天晴れな主婦の鏡というべきだ。

それにしても麦茶から素麺、茹で栗と作者もフル回転、作者には久し振りに慌ただしき一日だった。一日の労働を終え、鍋はどんな夢を見るのだろう。

・爪痕を里に残して去りゆきしツキノワグマにも上弦の月

田中あさひ

熊の被害がこれほど報道された年は少ないが、作者が見ているのは社会的な被害への告発ではなく、熊も見ているだろう上弦の月である。熊の被害という闇の部分には目を瞑っている。だからその目線の先がどことなくロマンティックで、熊の乱暴狼藉をひととき忘れさせてくれる。この一首を読む者は、作者の心やさしさが描き出したおとぎ話を味わえばよい。

その心は次の一首にこう詠まれている。「見上げたるわれに上弦の月は射すこの世の闇を一寸（ちょっと）かき分け」、と。

・不用意なひと言だったか珈琲に垂らしたミルク広がってゆく

中村　陽子

作者の後悔の気持は二句以下の光景に語らせている。よくある技法だから読者は、その具体的な事柄について自由に想像力を飛翔させればよい。作者は垂らしたミルクが広がっていく様を、最後まで見届けようとしている。いや見届けることで気持の鎮まりを待っているのだ。不用意な言葉を発したことは一再ならず、という思いもあったろう。「わたしってどうして！」、と。

だがそんなに大事件とも思われぬ。こんなことは日常茶飯事、場合によっては他人の「不用意」な発言に傷つくこともあるから、自他を含めた他山の石にすべし。

・お互いに老いたることは口にせず改札口に別れて来たり

馬場　美信

対人関係を上手に維持するのはなかなかに難しい。相手により場

合によって、それなりの心配りが要求されるからだ。この作者はそんな呼吸をよく心得ている。「お互いに老い」たことは承知のうえだから、あえて口にすることはないのだ。

さはさりながら、今回も改札口でさよならを言うまではそんな気持を抑制してきたのだ。一方で言ってしまえばよほどすっきりしたものを、という思いも残っているのだ。さてわたしの気持をどう宥めようかと考えながら、作者は帰途についたのだった。

・空は澄みトンボ止まりて秋模様季がわたしを追い越してゆく

会沢ミツイ

眼目は下句だから、上句には目を瞑っておこう。日常生活に追われると、身の回りの自然の推移をつい忘れてしまいがちだ。その落差を捉えた一首。忙しない日々を送っている読者には共感を得られるに違いない。これをしも大発見というほどのことではないが、それなりの面白味を持った歌である。

ところで上句はどうか、「秋模様」は読者へのサービス過剰だろう。工夫の余地を残したが、魅力ある歌として引いておきたい。

・あちこちに置き忘れてもなんとなく戻りてくれる黒き日傘よ

佐伯　弥生

人間の心理を上手く掬った歌。実際、不思議なことだがよくある事でもある。作者の本心は戻って来なくともいいのに、という気持がどこかにあるのだ。惜しいと思うほど上等の傘でもない、探す手間を考えたら買ったほうが安いと思っているのだ。そんなハンパな気持が一首に滲んでいて、なんとなく撫ったい歌である。

・かうしてる内に時間が過ぎてゆく白き山茶花こぼれつづけて

澤田久美子

自らの境涯を凝視した達者な歌である。とは言えけして肩肘張って歌われているわけでなない。むしろなだらかなで平明な一首だが、背後に抱えている世界に広がりと深みがある。かねてからこの欄で注目している一人。

技術的に言えば、下句は上手に躱したという情景だが、それも技巧のうち。ただしこの技巧は短歌伝来の技巧で、作者の独創というほどではないところが泣き所。先刻ご承知の筈である。

・もろもろのせねばならぬに生かされてせねばならぬが相棒となる

篠永　路子

着眼の良さ、面白さで採った。人間誰しもそれぞれの「せねばならぬ」に追われて生きているのだが、それと真正面から対峙しようとした姿勢に好感を持った。人生という重い主題との対決だから、ややもすると力負けしかねないのだが、それを「相棒となる」と身の内に抱え込んで、呼吸を乱さなかったところに作者の執念を見る。難を言えば、初句がお手軽になったこと。作者も薄々感じていたろうが、「身の内の」くらいにしておけばよかった。

・朝空より降りくるような蟬声に負けてお開き井戸端会議

中島由美子

さしもの井戸端会議も蟬声には勝てなかったという。何せ蟬声は「朝空から降りくる」というスケールだから、井戸端の回りの噂話、世間話とは桁が違うのだ。だからあっさり尻尾を巻いて退散したという。ところで作者はこの春、第三同人に昇格した新星。熱心に貪欲に勉強中だからきっと「香蘭」を背負う一人になるだろう。

加藤　英彦

鬱血のこぶし

鍵盤をたたけば生(あ)るる旋律のちから波濤に砕ける九月
ふいに響(な)る弾けるような諧調のしずくよ水琴窟はかがやき
銃をとらぬ少女たちまち火に捲かれその四肢とおく空に撓めり
ときに硬くひびく一音鬩ぎあう海中(わだなか)に圧しかえす力を
街区を埋めつくす連禱　幾千の瞋りのまなこが燈火(あかり)をともす
黒白の鍵盤はしる指さきは素水(さみず)ほどけるように流れて
土ぼこりと硝煙のなか立ちあがる影ありあれは撃たれし死者か
頽れし瓦礫の下に鎮まりて雪の匂いをのこすみどり児
吊されて掘(し)めあげられた鬱血の拳よ不服従のてのひら
その夜cadenza(カデンツァ)は騒げり火のような音階を駆けあがる指さき

◇ 招待作品 ◇　奇数月連載③

昨年暮れに豊洲シビックセンターホールで催されたヴァディム・ホロデンコのピアノリサイタルに圧倒された。フレデリック・ジェフスキー作曲「不屈の民」変奏曲。これは、チリの作曲家セルヒオ・オルテガの革命歌「不屈の民」を36の変奏で再構成したピアノ独奏曲である。かつて若きピアニスト山田剛史氏の演奏を聴き、その昂揚する音のうねりの激しさに打たれたが、今回はその感銘のすべてを打ち消して内腑を抉るような力の波動に慄然とさせられた。瞬きひとつ許さない緊張の連続であったし、楽曲とは奏者によってここまで変容するのかと思わせるほどわたしには初めての体験であった。

一九七三年九月、民主的に成立したチリのアジェンデ政権打倒を企てて軍部が一斉蜂起した。社会主義政権の転覆を目論んだいわゆるチリ・クーデターである。軍による大規模な弾圧が行われ、多くの市民が監禁され拷問され、殺害された。連行される民衆を励まそうとしたフォーク歌手ビクトル・ハラは二度とギターを弾けないように十指を落とされ、顔を切り刻まれて殺された。その後、ハラのグループとオルテガによって作詞作曲されたのが「不屈の民」である。原題は「団結した民衆は決して敗れることはない」。それからジェフスキーによる「不屈の民」変奏曲は、あらゆる国の抵抗歌として世界中で演奏された。幾つもの地で弾圧された民衆を内側から鼓舞する旋律として広まった。

音階とは忿りの奔流である。あるいは砕けちる怒濤の分岐である。譜面から突然音符が消えた。奏者の即興性に委ねるためだ。反復する旋律は緩急をへて音響は尖りを増す。

この楽曲の昂ぶりをことばに再現することはできないか。そんな不遜とも無謀ともつかぬ思いにかられた。諧調も乱調もその流れを溯るには、ことばはまず意味を脱がなければならぬ。ことばが意味を捨てて大きな音のうねりとなったとき、こころを揺り動かす力が生まれるのではないか。右は、そう思いつつ挑んで果たせなかった十の残滓である。

このピアノリサイタルを教えてくれた友人に感謝したい。異才の奏者ヴァディム・ホロデンコは一九八六年ウクライナのキーウに生まれた。今回は、四年ぶりの来日であるという。解説には「この演奏をウクライナ国民に捧げる」と記されていた。

「香蘭」とともに（5）

鈴木　桂子

〈「残酷」な記憶〉
〈戦うための「文学」〉

以下、昨今の私のつたない感想である。私が短歌を作り始めたのは六十歳を少し過ぎてから、六十五歳の定年を間近にしたある日、である。それまで意識して短歌を読んだことはない。（当然作ったこともない。）意識してとは特別な関心を持って、というほどの意味である。数少ないにしても折々、短歌を目にすることはあったはずだが、関心を寄せるには至らなかった。というより、当時の私は故意に短歌を退けたと言った方がいいかもしれない。私には五七五七七の三十一音という短かさで、何ができるのだろう、という短歌に対する不信感があった。確かにレトリックのうまさや、機智に富んだ面白さ、使われた言葉の美しさ等に心惹かれることはあったが、当時の私にそれらは、日常からの一時的な逃走、瞬間的な脱出の断片にしか映らなかった。私の求めるものとは違っていたのである。今なら別の見方もできるのだが。

それはそれとして、私は置かれた環境の中で知らねばならないこともあった。少くとも私が居住する集落で見た〈ある現実〉は、複雑不可解なものだった。そしてその記憶は長く私をしばった。まだ自分を護る何物をも持たない十一歳の、その春から夏にかけて、集落内で次々と自殺者が出たのである。家の隅で、厠（トイレ）で、庭の木で、納屋で、床の間で…。家人のいない昼間を選んで、全員が縊死であった。そして私は（一人で見たわけではない）同年の遊び仲間とそれらのいくつかを目撃した。家人は留守、近所のおじさんが駐在へ走り、とり残された遺体と一緒にいたのは近くで遊んでいた私達だけであった。駐在さんが来るまでを、来てからを私達子どもはただただ見ていたのである。一緒に見ていた仲間は何を思っていたのか分からない。見てはいけないものを見てしまったと思ったのは、どうしてなのかも分からなかった。事件はすぐに知れ渡り、伝染するように、次々と同じ事件は起こった。私はその場に居合わせたことを誰にも言わなかった。言ってはいけないことのように思えた。少くとも私は何も知らない子どもでいなければならないと思っていた。

人生とはこんなふうに終るのか、十一歳の子どもに「死者」の姿は衝撃的であった。以来、私は人生は私の予想外のところで展開していることを知った。思えば私の「文学」は、ここに始まっていたのかもしれない。私は「死者」の記憶を背負って中学生になり、高校生になった。「死者」は時々現われたが、それによって自分の日常に不全感を抱くほどにはまだ成長していなかった。私は私の日常を生き、死者は死者のままであった。

そして、私は大学生になった。本は読みたいだけ読めるようになった。「死者」は度々現われるようになり、その頃には私も「人生」というものを考えられるまでに成長していた。人は平等には生まれついていない。環境は戦う武器を持たない子どもに残酷であったが、私も成長した。「残酷」な記憶と向き合い、これから出会うであろう幾多の困難と戦うための武器を探し始めた。私はその拠り所として「文学」を選び（短歌は除外されたが）自分だけの歩き方をさがし始めた。私が最終的に頼ったのは「言葉」であった。

続・酔風船（3）

千々和　久幸

待つということ

待ち焦がれて、待てど暮らせど、待ちくたびれてなどという。今日ほど待たなくてよい社会、待つことが出来ない社会になっても、待つことを抜きにした生活は考えられない。これをしも「人生とは待つことだ」といってもさして異論はなかろう。

北九州の小さな炭鉱町に育ったわたしは、待つことが当然の毎日を少しも疑うことはなかった。高校は汽車（蒸気機関車）通学だったが、汽車の便は朝夕の通勤・通学の時間帯以外は、日に数本しかなかった。課外授業の長さにうんざりして先生に「早く帰らないと汽車に間に合いません」などと言おうものなら、「バカ、終列車があるだろう！」と一喝された。

わたしはもともと待つことが嫌いな質だった。東京で暮らすようなってからは待たないですむ環境に馴染み、会社では納期厳守が至上命令だった。そのわたしが過日、三ヶ月先の神田伯山独演会のチケットを買うために朝の七時から三時間待ったのだから、時計をなくしたようなものだ。仲間には呆れられたが、そのためずっと立ちっぱなしでもさほどの苦痛や退屈は感じなかった。

血気盛んな時期のわたしなら考えられないことだ。無駄と言えば、これほどの無駄もあるまい。待つことに耐えられるようになったのは、効率万能の時代に背を向ける生き方を身につけたことを意味する。神隠しの時間に迷い込んだようなものだ。それを歳のせいにするのは解り易いが、そんな世俗的な知恵は端から持ち合わせがない。

「待つこと」は実は「退屈する」ことと表裏の関係にある。そして「生きる」ことと「退屈する」ことは同義だと考えれば、「生きること」とは退屈すること」に行き着く。怪しげな三段論法だが、あっさり言えば、わたしはある時期から何かを契機に待つこと＝退屈することに耐えられるようになった、ということだ。理屈ではなく体験的にそうなった。

それは、人生は最初から「暇つぶし」だと達観している訳ではない。またそれほどのニヒリストでもない。サミュエル・ベケットのゴドーでもあるまいに、それをなぜわたしは憑物が落ちたように「退屈」に耐え得るようになったのか。そうでなくとも「暇」をどう潰すかは、「食？」ことと並んで人間のいや人生最大の難問であろう。それをカッコウ良く言い替えれば、次のようになろうか。

「〈待つ〉ことはしかし、待っても待っても『応え』はなかったという記憶をたえず消去しつづけることでしか維持できない。待ちおおした、待ちつくしたという想いをたえず放棄することなしに〈待つ〉ことはできない」（鷲田清一『待つということ』）、と。

迂回した言い方だが特に新味がある訳ではない。あっさり言えば、待つことの先に希望があるかどうかだ。希望と無駄（絶望）の間を揺れ動くスリリングな時間がいわば待ち甲斐である。間違いではない。「生きることは待つこと」と考えるならもう人生を生きてしまったことになる。わたしは明日もあなたを待っているだろう。

村野次郎への旅（167）

昭和期の「香蘭」（二）

千々和　久幸

今しばらく「香蘭」昭和二年（1927）一月号を読もう。前号の設問（アンケート）「現在短歌は餘りに古典的なりや」への村野先生の回答は次の通りである。

短歌が古典的であるといふことも畢竟するに程度の問題になると思ふ。或人に云はすれば古過ぎて現代人の言葉とは思はれなゐと云ひ、或人は決して古くはないと言ふであらう。飛行機やラヂオを歌つたからと言つて必ずしも新しい譯ではなく、古典的の歌として居ても内容の新らしいものがある。尚又現在の歌は千差萬別であつて一概に古典的であるとも云へない。けれども今他の一般文藝に比較して見る時は現代短歌の潮流が古典的であることは明らかである。これは其有して居る歴史が他の文藝と聊か異なつてゐることに基因してゐる。

更に又古典的傾向を來たさなければならない原因は短歌其もの本質が、神に對する祈禱の如きものを有してゐるからであらうと信ずる。モダンガールの銀座街頭に於ける會話の如きものであつては、誰であつても眞剣に祈禱する言葉には相應しくないと思ふからである。

（原文のまま）

「短歌は神に對する祈禱の如きもの」という意見はなかなかに面白く、釈迦空が言いそうだがここでは深追いしないでおく。それより村野先生の意見は、設問に対して真っ当かつ穏当な答だと読んだ。もしそうなら、アンケートそのものが最初から必要ではなかったとも言えるような模範解答である。

わたしのコメントは前号に書いたが、当時の「香蘭」人のなかにも短歌の古臭さを「負い目」と考える会員が居たのではないか、と思ったことだった。この問題は古くて新しいもので、あえて言えば短歌はそんな否定論に支えられて命脈を保ってきたとも言える。

次いで前月歌壇合評も覗いておこう。今月の評者は杉浦翠子、村野次郎、橋本政一、本間樂寛である。

自然

鹽釜神社

・この苑の鶴の鳴く音を旅ながら幽けき心になりてきゝをり　尾山篤二郎

・がらんとした湯室にわれは一人なり小夜中すぎて人の音せぬ

（翠子）（一）これだけのお歌だと思ひます。「旅ながら」と理由づけたところは失敗と思ひます。

（二）全然駄作だと思ひます。「小夜中」とはどういふのですか、「小夜すぎて」と同じ意味なのですか。然し、尾山さんだつて毎月傑作ばかりは出來ない。それは人間で被在るから。

（次郎）この歌を見て、他人の作は如何に辛辣に批評して見ても自己の歌になると、どうもうまくゆかないものであると云ふことを思は

せられる。全然駄作であるとは思はれないが、もつと氏の生地が出てゐてもよい。氏の歌であると思つて見ると、下手に神妙になつてゐる所が却つて食ひ足りないのである。

白檮

・みちの邊の枯草原のあかるきに人集ひゐて
　挙うち遊ぶ

・久にして友と飯食ふ今宵かも庭に白菊灯に
　照りかゞやく　　氏家　信

（翠子）（一）どうも私には何の感興も起こりませぬ。

（二）のお歌も私にはどうしてもお褒め出來ませぬ。殊に四五句に至つては、もう批評する言葉もありませぬ。お許しください。

（次郎）（一）は或異狀な空氣を出そうとしてゐる。大して難はないのであらうが、どうも狐につまゝれたような歌である。其處に何か足りないものがあるやうだ。（二）は出來そこねたと云う歌である、言葉だけ組合したが一首に心持がのりうつつてゐるとは思はれない。氏の歌一體にもつと詩があつてもいゝと思ふ。

覇王樹

・この庭の樹むらにとほる日のいろもまこと
　に見れば秋ふかみたり

・冷ゆる夜の机の下にある膝は固くすはりて
　うら虔ましも　　白井　大翼

（政一）一二首共に調子はなだらかに行つてはゐるが（一）の歌、四句をまことに見ればまことにの副詞が適切に使用されてゐない疑點がある。これは白井氏特有の持味かも知れないが、これが直ちに、つくづくとかつらつらとか云ふには考へ及ばれないまた季節の推移到來をかうした表現手法による事は既に陳套の域を出ず常凡といふ評を免れぬものと思ふ。氏の歌はかなり風變りの處があるが觀照確かである。また日常身邊些事をものされる手腕には敬服してゐるが（二）の歌は歌の内容的價値がどこまで流れてゐるかである。この二首共に氏のものとしては感服出來ない。

（樂寛）歌人が季節の推移に對して敏感なのはいゝ、併しながら、春さりにけり、秋ふかみたり、といふやうな言葉も濫りに使はれては價値を失する。まして調子がいゝ、歌ひいゝからといつて、白井氏なんぞがそこに安住すべきであるまい。殊にこの歌、まことに見ればと云ひながら、それ程に眞實味が徹しない憾みがありはせぬか。尚穿鑿に過ぎるやうであるが、この日の色は日光なのであらうと思ふ。して見れば一層適確性を減ずるといひ得よう。兎に角氏にしては、もう一歩この奥のものを詠つて頂きたかつた。（二）冷ゆる夜の机の下にあると云へば、見方によつては自分の膝ではないのかとさへ思はれる。尤も冷えきつてしびれた時など、自分のか人のかわからぬ位のものだが、それにしても、やゝ物足りない、一寸人の氣付かぬ所に詩材を見出でられたのには敬服するが…。

最後に村野先生の編輯後記の一部を引いておく。

○香蘭も第五巻の春を迎へた。會員全部この緊張味を有してゐれば如何なることも爲し遂げ得ると思ふ。本號は短歌の古典について諸名士の御意見を掲載することが出来た。深く感謝する次第である。

○表紙は例により北原先生にお願出來た。先生繁忙の際やうやく間に合ひ新装を以て諸君に見えることの出來るのは喜ばしい。今數年前よりの本誌表紙を見ると文藝以外の繪畫に於ける先生の藝術を知ることが出來て興味深く感ずる。